

【社会科】教科提案

一人ひとりの学びの充実をめざして ～ ひとり学習の充実を全体学習の場面へ ～

1. 研究テーマ設定の理由

(1) 社会科学習でめざす子ども像

社会科の究極的な目標は、社会生活を営んでいくために必要とされる「公民的資質の基礎を養う」ことである。一人の人間として社会に対してどうかわり、社会生活の中で自分はどう生きていくかを考え、社会の中で望ましい行動がとれるようにすることである。これは子どもたちに自分なりの「社会的なものの見方や考え方」を育てることと関連している。したがって社会科学習では、「社会的なものの見方や考え方」を身につけるようにするために、社会的事象に主体的にかかわらせていくことが大切である。

そこで、「社会科学習を通して実現すべき子ども像」を、次のように設定した。

A：事実を的確にとらえ、こだわりをもちながら学習をすすめていける子
B：社会事象への公正な判断力をもち、未来への生き方につなげられる子

Aの「事実を的確にとらえ」とは、事実に基づいて見たり考えたりすることである。様々な社会的事象から具体的な事実を的確に読み取ることが大切である。子どもがもっている社会的事象に対する見方や考え方は多様であり、それは、既習内容の理解や生活体験の差異に由来する。「こだわりをもちながら学習をすすめる」とは、社会的事象に対して疑問を抱くことも含め、自分なりに解釈（意味づけ）して考察することである。新たな社会的事象と出会ったときに、他者の考えと自分の考えを比較したり、共感したりする場を全体学習ととらえている。全体学習の中で、子ども一人ひとりが友だちとかかわりながら、自分の思いやこだわりをもって学習をすすめることにより、社会的事象をより総合的に把握したり考察したりすることができる。と考える。

Bの「社会事象への公正な判断力をもち」とは、社会的事象を一面的に調べ、理解することとどまらず、多角的・多面的にとらえることで、事象や課題を公正かつ総合的に判断する力を育むことである。社会的事象の多くは、立場を変えて見れば当然異なる見解が生じるものであり、多角的・多面的にとらえることで、より広い視野から考察・判断でき、子どもの中に個性的な見方や考え方が育っていく。また、自分の見方や考え方を表現し合い、友達と比較・交流することによって、より公正かつ総合的なものの見方ができるようになるに違いない。また、「未来への生き方につなげられる子」とは、自分が生活している社会に深い関心や愛着をもち、それをもとに自分なりの未来の社会像や生き方を描き出すことである。社会的事象を自分の生活や自分自身とのかかわりの中で見たり考えたりすることで、自分の考えや夢をより広げ、自分なりの生き方や生活の改善につなげていけるのである。そして、“自分にとっては”“自分ならば”など、自分を社会とのかかわりの中で見つめ直し、未来への生き方につなげていくことができる子に育てたいと願っている。

(2) 社会科学習における「学びの質の高まり」

社会科学習の具体的なねらいは、子ども一人ひとりが自ら問題意識をもって意欲的に学ぶ態度をはじめ、自分なりに思考し判断しながら問題を解決する力や自分の言葉で表現する力、学習の成果を自らの生活向上に生かす力などを身につけさせることである。社会的事象を単なる知識の部分だけで理解するだけでなく、社会的事象を多角的・多面的にとらえることで総合的に判断することが重要である。

このようなねらいを達成し、社会科学習を一層意義深いものにしていくために、全体学習と同様にひとり学習を大切にしたいと考えている。全体学習は考えをすり合わせ練り合う場であり、ひとり学習を発展させる場でもある。そこにおいて、全体学習はひとり学習のために、ひとり学習は全体学習のために相互に関連し合いながら位置づけられるのである。「その学習対象について、ぼくは〇〇だと思う。」「わたし

は、〇〇についてこんな疑問をもっている。」というように、学習対象に対して個人の思いをしっかりとつことから、ひとり学習がスタートする。学習対象と出会い、子どもたちは様々な疑問をもちながら追究活動をすすめるが、このとき指導者は、誰がどんな事を調べ、どのように資料作りをしているのかを確実に把握しておくことが大切である。子どもたちの考えや学習過程を知ることは、子どもと指導者との「つなぐ見とりと支援」につながる。また、自分の疑問を解決できない子に対し、調べ方や方法をタイミングよく助言することも当然効果的である。ひとり学習をすすめる、その学習を深めることで、地図やグラフなどの具体的資料を効果的に活用し、地域社会の社会的事象の特色や関連などについて考える力、調べたことを自分なりに表現する力を伸ばさせることにもつながると考えている。

学級での全体学習で話し合いが始まると、いろいろな考えが出てくる。友だちの考えをしっかりと聴き、自らの思いを出し合う中で、「なるほど、そんな見方や考え方があるんだな」と友だちの考えに共感することや、「ぼくと〇〇さんとは考えがちがうようだから、◇◇を用意して、もう一度ぼくの意見を言い直してみよう。」というように、学習対象に対する自分の考えを見つめなおすきっかけになり、新たなひとり学習の課題が設定されることが多い。このように子どもたちが“相互の刺激”をし合い、友だちの考えを知る中で自分の考えを一層深めることは、社会的事象や課題を公正かつ総合的に判断する力を育てる上でも大切である。また、友だちの知識や考えを比べたり・つなげたり・まとめたりすることで、知識と知識を再構成し、具体的な事実に対する理解が深まるのである。

2. 研究の展望

社会科学習で、全体学習につなげるためにひとり学習の充実に重点をおいている。ひとり学習を充実させるための重要なポイントとして、次の3点が考えられる。今後の研究の視点としたい。

①学習問題（課題）とのかかわり

学習問題と出会ったとき、子どもたちは様々な疑問をもちながら追究をはじめ。学習問題とは、子どもの問題意識と表裏一体の関係で成り立つ学習テーマである。問題解決への追究の見通しがもてる適切な学習問題でなければならない。様々な方向から追究できる課題を設定したいと考えている。

②単元計画の開発と充実

学習問題（課題）とともに重要なのは、単元計画である。子どもたちが興味・関心をもつような活動や調査見学を取り入れた単元計画が必要である。また、子どもたちが深く追究したくなるような学習課題（問題）との関連性や他の友だちとの学びの交流を考慮した単元計画が大切である。

③ひとり学習における学びの質の変容

学習問題（課題）と積極的にかかわっていくと、ひとり学習の問題意識が深まっていく。その場合、一人ひとりの見とりと支援が重要になってくるのである。そこで、ワークシートや座席表を活用し、子どもたちの変容を把握しながら学習を組み立てたいと考えている。

3. 成果と課題の把握の手立て

社会科の学習内容は、主として現代社会の事象を取り上げるため、より具体的・直接的に現実社会とかわることが重要となる。社会の仕組み等を、単に知識として獲得するだけではなく、「ひと・もの・こと」という具体的な対象とかわらせる中で認識され、それを追究していく過程を通して深化していくものであると考える。自分の知識を活用しながら、他者の考えや思いに触れる中で、新しい問題を見つけ出し、追究を深めていくためには、主体的に学んでいこうとすることが大切である。また、問題解決のための調べ学習では、一人ひとりの子どもに寄り添いながら、学習意欲やそれぞれの問題意識を高めていく指導姿勢も重要となってくる。個々の考えや姿を見とり支援していくことは、行き詰まっている子どもにも自信をもって学習に取り組ませることにもつながる。この場面では作文やノート・ワークシート・座席表等を活用しながら、一人ひとりの調べ学習の状況や追究意欲を評価したいと考えている。全体学習は、個々の学びを深めさせながら、学習経過や学習成果を交換・交流させる場である。発言者が偏ることのないように気を配りながら学習をすすめていきたいと考えている。